



ホームページ <http://www.cpi-mate.gr.jp> URL English <http://cpimate.com>

お陰様で、日本からの子ども支援 25 周年を迎えられました。
C.P.I.の原点をみつめなおし、新たな出発を致しましょう。

インターンを募集していますので応募をお待ちします（25 歳までの方）

2014 年以降、インドネシアでの新しい旅を、若者向けに提案していこうとしています。C.P.I.が育ててきた教育里子の卒業者たちと一緒に、目に見える成果としての学校施設での子どもたちと交流し、体験する。これをワークキャンププログラムとして進めるスタッフを、インターンとして募集します。

それでは、この25年間を振り返ってみます。25年前、C.P.I.の子ども支援が発足した当初、日本国内のインドネシアとの市民間相互理解活動は、小さなものでした。

1979 在日インドネシア留学生との国際交流を京都で始めました。

1988 東京原宿の画廊で“INDONESIA 人をもっと知ろう”シンポジウムを、毎週土曜日に、4 か月間行いました。画廊を貸して下さった方、応援して下さいました方々に感謝しております。

1989 原宿の集まりに毎週参加していた在日留学生協会のメンバーと共催で、東京・目黒のインドネシア人学校を借りて、『人間環境をよくするための協力活動』を模索するシンポジウムを開催しました。様々な団体が、〈日本人にとっての国際協力とは何だろうか〉との根本テーマを模索していた頃でした。当時の C. P. I. は、交流会の料理も参加者ひとり一人が手料理一品を持ち寄るなどして、手づくりの活動に、みんな一所懸命でした。



1989 同じく原宿の集まりに参加していた在日インドネシア留学生協会の代表者スダルソノ氏に、スリランカでの教育里親制度プログラム開始を伝えたところ、それが刺激となり、インドネシアでも開始したいとの熱意が盛り上がり、彼の友人で同じく原宿の会に参加されていた Ki. M. SAID 基金会の理事長代理マルタニ氏から、同基金会在インドネシアでの協力団体となりましようとの申し出を受け、それを承諾して話し合いに入りました。

Ki. M. SAID 基金会は、タマンシスワという学校組織の3代目理事長 M. SAID さんの遺徳を記念して、奥様を理事長として教え子たちが設立したものです。

同基金を支援していたタマンシスワは、インドネシア教育の父と言われるハジャール・デワントラ氏が、1945 年の独立闘争当時に設立し、全国に 2000 校ものネットワークをつくりあげた伝統的教育組織であり、人々から絶対の信頼を勝ち得ていました。

1989 年の初夏、タマンシスワの中央委員会は全国から支部長を集め、日本との奨学金プログラムを開始するに際して、次の項目で、真剣な討論を行いました。

※ 対象とする学年について：中学3年生と高校3年生の子どもは、教材費が1年生～2年生のときに比べて二倍になり、卒業試験費用も必要となるため、3年生になる前に脱落する、という現実があります。この状況は、中学校までの就学を義務教育としている今も変わりません。そこで当初の活動目標は、なるべく多くの子どもに機会を与えたいとして、中学・高校の各3年生に支援したい、との意見が大勢を占めました。

※ 対象とする地域について：また、当初の対象学校は、「インドネシア側が管理しやすいように」ということで、タマンシスワのジャカルタ教育委員会およびジョグジャカルタ教育委員会を地域センターとして選び、徐々に対象地域や学校の種類を増やすことになりました。

※ C. P. I. は当初から、現地での信頼ある団体をカウンターパートとして教育支援を始めることにしていましたが、Ki. M. SAID 基金会との協定ができたのは、有難いことでした。

会議中、当時の知識人の中に、第二次大戦中の日本政府による『南方留学生制度』の記憶があったが故に、活動の根本理念につき鋭い質問がありました。

※ 昔のこととはいえ、第二次大戦当時、日本政府は、東南アジアからの留学生を「日本への協力者として育てる」国策で、留学制度を運営していたようです。しかも、それは、あからさまなものであったらしく、日本政府の命令に従わないインドネシア人留学生たちへの締め付けも厳しかったそうです。そうした記憶の中で、知識人たちの間には、日本からの教育支援に対する疑惑的な見方もありました。タマンシスワ教育委員会との討論の場での最も鋭かった質問は、「C. P. I. は何のために教育支援をおこなうのか？」と活動の理念を問われるものでした。

※ その質問に対し、C.P.I.側からは、すぐに返答が行われました。

「日本とインドネシアは、経済的な関係は強くなっているが、国民同士、人と人が友情を築くという意味での友好関係は、まだまだと思う。第二次大戦中にあった様々な不幸なことをほぐして、お互いを大切に想いあえる関係をもつ人々の輪を広げたい」

その返答が行われたとき、会議の場は一気に、ともに活動を進める雰囲気となりました。

こうして、最初の教育里子7名から、インドネシアでの教育里親制度が始まりました。

「海を隔てた人と人が、互いを大切に想いあうようになることが、私たちの目指す活動である」。これは今に至るも C.P.I.の原点です。

※ 対象学生を、貧困家庭に育ちながらも成績優秀で自立精神の高い学生としました。

※ 奨学生を教育里子とする教育里親制度で、助け合いとしての教育支援を行い、海を隔ててお互いを大切に想いあう関係を育てていこうということで一致しました。

※ 当初の活動拠点をジャワ島では東ジャワ州、中部ジャワ州および西ジャワ州ならびにジャカルタ特別州とし、中部スマトラ州も含んでいました。(現在は、南スラウェシ州が加わり、中部スマトラ州は地域リーダーが亡くなり後継者が見つからず、閉鎖しました)

若者同士の受入・派遣プログラムから、現地の運営を助ける若者が育ちました

また、1989 年～1993 年まで、現地との間で、学生を含む若者同士の交流を高めボランティア作業を行うための受入・派遣プログラムを行いました。その中から、現地の若さあふれる地域リーダーが誕生し、この段階で、奨学制度の現地運営組織を、共同で設立しました。PPKIJ（インドネシア日本教育文化センター）と名づけ、現在に至っています。本誌冒頭の若者交流の呼びかけには、今の、若い世代への、熱い期待が込められています。



日本で車椅子ダンスを習う



インドネシアでのワークキャンプ

C.P.I.の各地での会員の活動も、手づくりの展示会・料理会から始まりました。

1990 年から 2009 年頃まで、日本各地で、C.P.I. 会員有志による、公共の場所を無料で利用する手づくりの展示会、あるいはご協力戴ける店とタイアップした『里子の国の料理を味わう集い』といった手づくりの、しかし大事な活動が盛んに行われていたのも、心暖まる思い出です。



公共の場所での展示会



留学生とともに楽しむ料理会



南九州の留学生は熊本に集合

新しい教育里親さんの体験入会場の、『現地の教育里子に会う旅』

インドネシアの教育里子と会う旅も、C.P.I. 本部または、各地の有志の呼びかけで盛んに行われていました。そこに参加することから教育里親さんになられた方々も少なくありませんでした。



教育里親と奨学生との対面を兼ねてピクニックを楽しむ



地震による全壊後に CPI が復興した里子の家

1995 年 12 月 25～27 日 毎日新聞「この人」欄で、C.P.I.が目指していることが、3日間連載されました。ホームページの『新聞掲載紹介』で公開しています。

会員の要望で、教育里子への支援期間を中学 3 年生から大学までと切り替えたのは、この頃です。また、この時期に、現地の各地で教育界の人々との会談が、C.P.I. 会長の巡回で行われました。

「優秀な人材を教育支援で育ててくれるのは有難い。さらに、学校教育の延長が地域振興に係るよう、能力開発の道を開拓しようではないか」と協働に向けた要望があり、それは尤もと考えました。そこで、その実現を図るべく、次のように、1998 年以降の様々な活動を積み重ねました。また、能力開発の成果を出す『住民参画型の開発プロジェクト』への参画も行っていました。

1998 日本政府の助成により、チアンジュールに、インドネシアに職業訓練施設を設立できました。



寄宿舍もある訓練学校



スリランカから、SNECC 事務局長もお祝いに来て下さった



1999 インドネシア政府内務省との共催で、『一村一品運動 in INDONESIA』のタイトルでセミナーを開催しました。参加者は地方政府の市長クラスでした。45 の市および郡から市長（ワリクタ）・郡長（ブパティ）が参加されました。日本からの講師として、京都大学東南アジア研究所の水野広祐教授が駆けつけて下さり、インドネシア政府から BBPT のディレクター、インドネシア大学経済学部長のマルタニ教授（PPKIJ の責任者）が担当して下さいました。

2001 セミナー参加されていたスマラン市の市長から、高地の農地利用と住民生活向上 について相談があり、土地なし農民の生活向上につながるなら協力すると申し上げてスマラン市との協働チームが発足させ、そのテーマではインドネシア初の取り組みを開始しました。

2005 4年に及ぶ準備を経て2005年に開始されたスマラン市の高地土地なし農民生活向上プロジェクトは、世界銀行が日本政府から運営委嘱されているJSDF（日本社会開発基金）による無償資金支援により実施することができました。このプロジェクトは、C.P.I.の小西会長が住民参画型開発に係る専門家として役目を果たし、円滑に進めることができ、2005～2007年の3年間で所定の目標を達成し、同種プロジェクトのモデルとなっています。



地方政府に設置したチーム



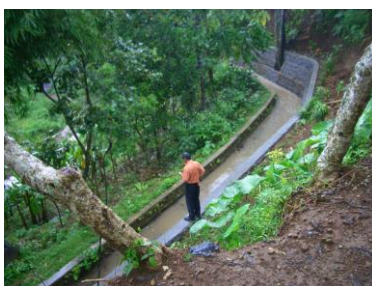
プロジェクト地域の完成農園



農民たちとの協議会



新しく組織した農民組合



村々に無償で造成した灌漑設備



村々に無償で造成した道路

〈追記〉 従来、インドネシアでの地域開発には、住民は一切参画できず、ときには森林伐採の計画を知らずに行った農地開発が水源の枯渇により無に帰すという事例、あるいは政府の開発に参加したあげく、ある程度成功した時点で土地から追い出されるという事例が枚挙にいとまなくあったものです。こうした事態を改善し、住民参画型の開発に切り替え、最底辺の農民に技術を教えていくことが、結局は地方政府のための税収アップにつながるのだという理論で地方政府を説き、実現させたものです。

2007 5月、C.P.I.はインドネシア政府に登録。C.P.I.事務所登録もできました。

7月、日本政府により、国税庁認定NPO法人として認定を受けました。

11月、日本の民間NGOとして唯一、インドネシア政府内務省との間で協定を締結しました。

新設のC.P.I.事務所を開始するセレモニーでは、在インドネシア日本大使館の野ロー等書記官およびC.P.I.代表、PPKIJ代表から挨拶がなされました。



ところで、現在、国際 NGO は政府登記を義務付けられ、毎年、政府によるモニタリングおよび評価に係る調査を受けています。C.P.I. も、奨学支援の成果あるいは、教育開発が地域振興に繋がる事例を報告することが、必要となりました。現地での役割と責任が重くなったと感じています。

2008 教育里親制度 20 周年を迎え、長年にわたり続けて下さっている教育里親さんの顕彰式典を在日インドネシア大使館からの来賓として教育部長において頂き、教育里子代表のシギット氏が心暖まる挨拶をしてくれました。



また、国別フェスティバルとして有名な代々木公園で、第一回の日本インドネシア市民協力フェスティバル（於：代々木公園）の主宰を始めました。日本国内での「日本人とインドネシア人との友好と協力関係を高める」活動を広く一般向けに行うためです。



2009 第二回日本—インドネシア市民協力同フェスティバルは、ジョグジャカルタ大地震で被災した母子家庭への能力開発プロジェクトを目標としたチャリティ催事としました。それをきっかけに、女性および青年への能力開発を担当するインドネシア政府青年省から、フェスティバルの視察を兼ねた日本研修団が来日しました。C.P.I. は、青年省と地域振興能力開発で協働できるチャンスと捉えて研修団受け入れを行い、有機農業、魚加工センター等、能力開発の必要な分野について研修を行いました。

〈追記〉 その結果、日本研修を受入後、インドネシア政府青年省から、C.P.I. の職業訓練センターの増築を、全面的に資金支援しようとの連絡があり、翌 2010 年に増築できました。旧・訓練センターは、薬剤師育成を目標とする高校として生まれ変わり、卒業しても新しい知識を定期的に勉強できるコミュニティカレッジとして活躍しています。



青年省自立振興局の漁業および有機農業に係る日本研修プログラム

新・訓練センターの開所式

教育支援 25 周年を迎え、支援を農村・山村・漁村に重点を移していくべく、準備を進めています。以下ご覧戴き、周年ご協賛にご参画願えればありがたく存じます。

25 年間に、都市部での定着住民は、それなりの収入が得られるようになりましたから、教育支援の場を見直すことにしました。教育支援が生きる地域で活動できるよう、活動地域を見直そうということです。2012 年以降の各地別の目標は、ホームページから本誌 9 号でご覧戴けます。

例えば、スマランでは JSDF プロジェクトで高地農村開発を行った地域のような山村の子どもたちを育てるとの視点に立とうとしています。

南スラウェシ州や東ジャワ州では、学校環境の改善を図りつつ教育支援を進ようとしています。

それらを進めるにあたり、地方政府との連携を図り、外部資金導入を図り、地元の有名大学との協定のもとでデータ収集調査などをきめ細かく行く必要があります、それらを着実にこなしていきます。

一例をあげますと、日本政府の資金導入で 2013 年に竣工させた南スラウェシ州の離島での漁村改善に係る能力開発を目標とする中学校を設立が挙げられます。今後、第二、第三の中学校の設置のため、日本の人々と喜びあえるプロジェクトにしたいと、関係者と共に、計画を立てています。

別例では、5 年目を迎えたチアンジュールでの薬剤師育成を目標とするコミュニティカレッジが挙げられます。こちらも、益々、運営ノウハウを積み立て、モデル校としていきたいと考えています。



チアンジュールの薬剤師専門高校と生徒たち



山村の母子



南スラウェシ州プンカッブ郡の島に新設した中学校と生徒たち。校舎に寄贈者の名が刻まれました



南スラウェシ州で建設予定の中学校に通いたい子どもたちからの手紙です

私たちは、タナケケという島の隣にある小さな島の子どもです。友だちと一緒に魚をとる仕事でお父さんを楽しませたいです。日本の人たちがタナケケ島に中学校を造って、魚をとる勉強をさせてくれると、今日来た大学のお兄さんに教えてもらいました。私たちも村の舟で通うことができます。楽しみにしています。